

2013年4月22日・河北新報では

『悲しみの向こうに一故郷・双葉町を奪われて』

二階堂晃子 著

東日本大震災による福島第1原発事故で故郷が壊滅的な被害を受け、心に深い傷を負った人の悲痛な思いが胸に迫ってくる詩集だ。震災の悲劇を叙事詩的に表現した詩群が心に重く響いてくる。

本書は第1章「悲しみの向こうに」13編、第2章「介護日記」10編、第3章「緩やかな絆」11編の計34編を収録する。

第1章はすべて原発事故に関する作品だ。「奪われた故郷」では、原発立地をめぐる利害関係や地元住民の意識などを盛り込んだ。〈大災害に遭ったことのない素朴すぎた田舎者が／疑うことを知らずのせられた大罪／やっぱり東京の人は口がうまかった／口がうまかった東京の人／いや、東京電力の人〉など、辛辣な内容になっている。

著者は学校心理士で福島県現代詩人会員、「山毛櫨」同人。1943年福島県双葉町生まれで、現在は福島市で生活している。後書きで「悲しみを存分に書き残すことが、今、私がなすべきことであると思うようになった」とつづっている。

と紹介されています。